

団塊のカタログ

第1号

平成8年6月

前がき

ワシは昭和23年（1948年）のネズミ年生れの、いわゆる**団塊の世代**である。

団塊はかたまりのことで、昭22年～24年生れが他世代に比やたら多いからなのだが、そのちょっと前の20年8月6日、あのウソばかりの大本営すら「相当の被害を生じたり」と発表せざるを得なかった**新型爆撃弾（原爆）**がヒロシマに投下され、9日にはナガサキにも同様の爆撃が行われ、さらに今なら勝てる！とそれまで**不可侵条約**下にあったソ連がソ満国境を越えて進撃を開始した。

北からゴジラ、南からキングギドラに同時に攻め入られるようなもので、とうとう「もう、やめてェ！」と、あの日本の最も長く暑い日の8月15日、日本政府はポツダム宣言（＝無条件降伏）をシブシブ受諾、昭和16年（1941年）12月8日の**真珠湾奇襲**以来3年8ヵ月余り続いた太平洋戦争（第二次世界大戦）はよーやく終結を迎えることになったのである。

☆

それまで「今日も決戦、明日も決戦」「頑張れ！敵も必死だ」「たった今！笑って散った友もある」「撃ちてし止まむ」と戦場に駆りだされていた男たちは日本に戻り、「理屈言ふ間に一仕事」「足らぬ足らぬは工夫が足

らぬ」「欲しがりません、勝つまでは」「**贅澤は敵だ**」「**南瓜を作らせう**」と、健気にもたくましく銃後を守り続けてきた女たちと再会することになり、いろいろあって、その結果、戦争を知らずにワシらが生まれてきたのである。

ここらあたりになると、湾岸戦争ならなんとか記憶にあっても、ベトナム戦争すら知らぬ十代・二十代の皆さんには何がなんだかわ

からないことばかりだろうが、そういうワシらにしても似たり寄ったりで太平洋戦争についての実感はほとんどないといっているだろう。

☆

いわゆるものごころが付くというのは3才から5才位だろうと思うが、ワシらのその頃（昭和25～28年）は朝鮮戦争（この後南北に分裂。今に至る）特需とやらで日本経済が上昇の**一途**をたどっていた頃で、このあたりからそろそろ記憶らしきものが頭の片スミにへばりつきだすそして「ゴジラ」の封切られ

た昭和29年、ワシらは小学校に進学した。

「海に**無敵艦隊**、陸に**クロガネ**」だったのは親の世代のことで、ワシらが小学生の頃は自衛隊がアテにならないぶん「空に**鉄腕アトム**・**鉄人28号**、陸に少年ジェット・まぼろし探偵・月光仮面」がいたりして、敗戦から



一転してイッキに国家の安全が保障される時代になった。

丸ノ内にある松竹ピカデリー（今の有楽町マリオンの一部）で「ウエストサイド物語」を観たのは中学生になった頃、東京オリンピックを横目でにらんでいたのはナマイキ盛りの高校生の頃で、大学に入った年にはビートルズがやって来たりもした。

（ジマンだが、ワシは2度も公演に行ったぞ）

女のコたちはパンストで大根足を包み、ミニ・スカートからそいつをニョキッと出して挑発し、

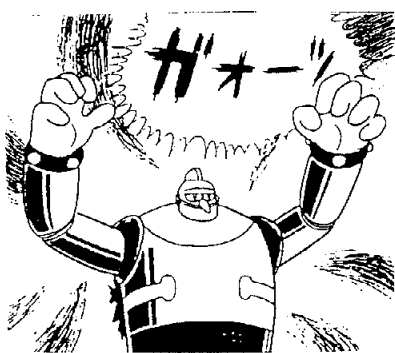
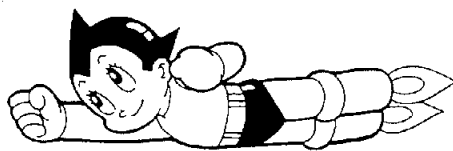
男どもはアイビーとかコンチネンタルのスーツに身を固め、ゴーゴー・スナック（今のディスコ）でナンパしていた時代である。

かと思えば、反戦・反米・反権力を三点セットにしたコーハの学生運動も盛り上がった、それがワシら^{だんかい}**団塊の世代**なのだ。

希望と可能性に満ちあふれていた十代、社会の荒波にホンローされっぱなしだった二十代はいうに及ばず、中堅どころとしてモーレツに働いた三十代さえとくに過去のものになってしまい、今や守りに必死の四十代の、それすら最終コーナーにさしかかっている。

老年だって、そう遠い未来ではない。

となれば、そろそろこころへんで幼・少年時代を振り返ってもみようと勝手に思い込んでしまったのである。というわけで、まずは「幼稚園編」から。



第1章

幼稚園の頃

昭和23年~28年

中央会堂幼稚園

昭和でいえば23年、西暦でいえば1948年の3月29日が「天孫降臨の日」である。

で、高千穂の峰は東京都江東区亀戸だと聞かされてはいるのだが、なにせ1・2才までのこと、その頃の記憶などあるわけもなく、そこで、幼稚園の頃から中学・高校を卒業するまでの思春期（なんとも古めかしく、なんとも懐かしく、かつコソバユいひビキがある！）を過ごした文京区本郷3丁目44番地7号（地名変更前は春木町3丁目25番地）をとりあえず故郷と決めている。

お役所の許認可が必要なわけでもないだろうから別にカマわないとは思いますが、その一方

で、そんな幼稚園時代の記憶がろくすっぽないのも、悲しいかな、事実である。

平成8年現在、ワシの長男（真一）は昭和47年生れの24才、長女（純子）は49年生れの22才、2人とも千葉県松戸市栄町にあるさかえ幼稚園に通っていたが、お世話になった担任の先生の名前は今でもはっきりと覚えているが、ワシなどはとっくのとうに忘れてしまっている。

☆

その忘れ去られてしまったアワレな幼稚園は**中央会堂幼稚園**といって、東京都文京区本郷に今でも（失礼！）健在で、可愛い後輩たちが元気に通園している。

正式名称は日本キリスト教団本郷中央教会というらしいのだが、今も昔も**中央会堂**の方が通りがいいそうで、これもなんとなくうれしくなってしまう。

本郷通りと春日通りが交わるのが「本郷3丁目」の交差点で、こいつを上野方面に向かって100メートルも行くと、右手に場違いとおぼしきヤケに古めかしい鉄筋コンクリートの建物が目に入ってくる。

これが我が母園の中央会堂で、春日通りをはさんだ向いのチョイ右に本郷消防署と本郷富士警察署が仲良く並んで建っている。

さらに警察署を左に曲がるとこれまた我が母校文京区立第四中学校があって、突き当たりには東京大学の竜岡門

(別名病院門。
他には赤門・正門・弥生門。

東大には裏門はない)がポッカーリと口を開けている。

したがって、防火・防災・保安・健康・通学面ではこれ以上ない恵まれた環境で、その気になれば東大には歩いて通えるのが中央会堂とその周辺地域なのだが、これがまたチャーチ・ゴシック様式という、いかにも教会らしい古めかしくも堂々とした建物なのである。(写真参照 ㊟)

その中央会堂は2・3階が650席を有する礼拝堂で、その一階部分に我が中央会堂幼稚園がある。

「だれでも気楽に入れるように」と、いつも開けっぴろげにしてある正面入り口をくぐると、その壁には60年以上にわたって東京の歴史を見守ってきた古〜い銅版が掲げられている。

一番上にCENTRAL TABERNACLE、そのすぐ下にはESTABLISH

ED.....1890

DESTROYE

D.....1923、

RE-ERECT

ED.....1929

と浮き彫りになっている。

これらが銅版の上部3分の1ほどを占めているのだが、その下にはひとときわ太いたて書きの日本語で……

中央會堂

と記されている。

その右には創立明治二三年・震災大正一二年・復興昭和四年と外側から順に記されてい

て、これが英文の和訳だろう。

さすがに老朽化こそしているものの、昭和4年に建て直されたのなら、東京大空襲には焼け残ったことになる。

————— ☆ —————

人命より歴史的建造物を残そうと思ったB29は東京大学を避けて律義に爆撃し、そのあおりをくって「本郷一帯は焼け野原になったんだヨ」とワシのおバアちゃん(明治18年生まれ。昭和40年没。享年80才)からよく聞かされていたが、そんな中でも教会は消失を免れたのだ。(耐震性はともかく耐火性◎)



空襲で見渡す限りの焼け野原に唯一つ、まさに救世主のごとく高くそびえ立つ教会……これは感動的であっただろうし、これこそ奇跡！と思った日本人はさぞ多かったろう。

———— ☆ ————

さて、そんな廃墟からの復興は目覚ましく人によっては忌まわしい、人によっては歓迎すべき敗戦から7年たった昭和27年の春、それまで中断されていた園児募集がやっと再開され、その記念すべき第一期生として入園したのがワシら**団塊の世代**である。

楽しい思い出もつらかったことも大いにあったはずなのだが、クヤしいことに、いくらがんばっても当時の記憶がほとんどよみがえってこない。

しいていえば、1ヶ月に1回配布される幼児向け雑誌があって、それが「チャイルド・ブック」と「キンダー・ブック」だったというくらいだ。

もともとモノ覚えがいい方ではなく、この頃は昼に食ったメシさえ努力しないと思いつけないこともあるくらいだからひどいものであるが、そんなワシでも、古〜い写真を引っ張り出すと、大昔の記憶が少しずつ断片的によみがえってくる。

前髪をキッチリそろえた坊っちゃん刈り、おハナは今と同じで高からず高からず、最前列でウンコすわりしてガンを飛ばしている。

表情は多少カタいが、さすがにこのくらいの歳ならワシでも一応は可愛い。（筆者注・少なくとも今よりは）

セピア色の画面はピントもビシッと決まっていて写りは結構良く、右半分には今と変わらない中央会堂の外壁が、そしてその前に国際自動車サンの観光バスが駐車しているところを見ると……ズバリノ遠足でしょう！！

方向指示器がウインカー（点滅式）でなくアポロ（腕上げ式）であるところがご愛嬌で、



今ではビルが立ち並んでいるあたりにはなへんもなく、ただひたすら空間だけが目立つ。

☆

昭和29年の3月に中央会堂幼稚園を巣立ち、アッという間に40年の月日が流れ、今は都落ちして千葉県松戸市に住んでいるワシ、時間的にも地理的にも中央会堂幼稚園と遠く離れて久しいが、平成3年8月のある日、別にこれといった理由があるわけでもないのにヒョッコリ上京、なつかしの中央会堂を訪れてみた。

東京都文京区本郷3丁目37番地9号に、良くいえば歴史と伝統のある、悪くいえばただ古くさいだけの建物は当時とそのままだにその場所にあった。

よくスベリ台にして遊んで怒られた階段の手すり、木の地肌むき出しのチョコレート色の床・・・35年前にも古く感じたものだったが、それもそのまま、いや、さらにいっそう古めかしくなっていて残っていた。

それだけでも懐かしくてしょうがないのに、ナ・ナント当時の担任でいらしかった伊東愛子センセーに、キセキか単なるグーゼンか、お目にかかることができたのである //

☆

それはそうと、例のセピア色の遠足の写真だが、良く撮れていたところを見るとどうやら天気は良さそうだったみたいだ。

心待ちにしていた遠足に良い天気とくればこれはウヒヒものの、で、この後どこへ行ったんだか、まるで記憶にない。

小さい頃だったからといってしまえばそれまでだが、伊東センセーはちゃんと覚えていらっちゃって、当時の思い出をスラスラと語ってくださったのである。

むこうがおか

向ヶ丘遊園地、ユネスコ村、それとも菊人形の谷津遊園、六義園、新宿御苑にも行ったこともあったそうだが、コチトラ当時の記憶がほとんどなく、情けないを通り越してなんとも腹立たしい限りだ。

必然的に「へえー」「そうでしたか」とナマ返事を繰り返すばかり、顔にこそ出されなかったものの、センセー、さだめしあきれていらっちゃったことだろう。

☆

さて我が母園はキリスト教会付属のミッションスクールならぬミッション幼稚園、したがって、聖書の話とかお祈りなどが1日で一番大切な時間であるはずなのだが、そんなセンセーの思惑とは裏腹に、礼拝はワシらがキンちゃんどもには少しばかり退屈であったようである。

これもほとんど記憶になかったが、「礼拝が済みますと、スキップのマーチで急に一同明るく賑やかになり仲良しのお友達を誘って2人スキップで1周したり、楽しいひとときを過ごします」と、幼稚園母の会発行の「ぶりゅす」でセンセーがそう書いていらしゃるのを拝見して、少しずつではあるが記憶らしきものがよみがえってくる。

そういえば、広いホールに園児用の小さい椅子を、ミステリ・サークルよろしく、二重に並べてお祈りをしたり、ハンカチ落としゲームもしたこともあったっけ・・・

中でも、センセーのご指摘どおりスキップが楽しかった記憶は、確かにある。

ひとりの時は両手を腰にチョココンと当て、ふたりだと横にならんで、自分の右手と相手の右手を（左手も同様に）握手するようにつなぎ、スキップ・スキップ・ランランランと



「君の名は」28年

ばかりにホールを回ったもんだ。

パートナーがかわいい女の子（この頃からすでに好き嫌いは存在する。相手もそうだとこまることもある）だと心もはずむけど、男女の数のバランスが崩れて男同士で手をつながなくてはならないこともあったりして、そんな時はオチこんだものである。（大体、いつでもどこでも男の方が数が多い）

クリスマスがイエス・キリスト様の誕生日なんだくらいは理解していたけど、ジュースとお菓子にばかり気を取られていたっけ。

ずいぶん前の出来事なのに、伊東先生はつい昨日のこのように話してくださったおかげで、部分的・断片的ではあるが、だんだん

記憶の糸をたどれるようになった。

————— ☆ —————

新しいものが古いものにとって代るのは世の習いであるし、そうでなければ進歩も発展もなくなってしまうが、中には、そのままにしておきたいものがいくつかあってしかるべきダ、とこの頃はヒヨるようになった。

我が中央会堂もその1つで、その為に関係者の方々は大きいなる苦勞をされている筈で、ガラにもなく、ここに謹んであらためて感謝する次第である。

隣人は愛しても敵は憎む、右の頬を打たれたら一生忘れないといった具合に、聖書の教えを理解しなかった不肖の卒園生だけど、

ジャイアンツじゃありませんが・・・

中央会堂幼稚園は永久に不滅です！！

オマケ

おなじみのレオナルド・ダ・ビンチの「最後の晩餐」とはずいぶんちがったアングルと作風である。（誰がイエス様で、誰がユダだかわかりますか）

実物は結構大きな立派な作品で、昔から中央会堂の二階に飾ってあったとおっしゃるのだが、どうも記憶にない。

それもその筈で、今でもそうだが教会部分は大人専用だから園児は入れないのだ。

なお、伊東センセーとはこの絵の下でいろいろお話を聞かせていただきました。



定方耀慶画伯筆「最後の聖晩餐会」（教会所蔵）



いかがでしたか？

あい♡まつと

同様、こちらも皆様のご都合を一切無視してお届け致しますが
お許しとご愛読の

ほどを

沢間



俊太郎